

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：32612
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：18K17532
研究課題名（和文）看護師の外国人患者への対応能力の向上を目的とした外国人患者対応支援ツールの開発

研究課題名（英文）Development of a Support Tool Aimed at Enhancing the Nursing Competency of Foreign Patient Care

研究代表者
浅川 翔子（ASAKAWA, Shoko）
慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・助教

研究者番号：50804118
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：在留・訪日外国人患者は今後も増加すると見込まれる。医療現場での外国人患者対応を支援する既存の資源の活用度が低く、現場の看護師の外国人患者対応には未だ障壁が生じている。本研究課題では、中でも需要の増加が見込まれる救急医療領域において、現場の看護師の外国人患者への対応能力、既存資源の活用状況、活用の阻害要因を分析し、既存資源を活用した外国人患者対応支援ツールの開発に向けて検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国人患者に対する対応において、看護師は困難感や精神的負担を感じている。また、救急医療領域において民族的マイノリティが受ける医療には格差が生じやすいと言われている。本研究結果により、救急医療領域における看護師の外国人患者への対応能力が向上し、看護師が困難感や精神的負担を感じることなく本来の力を発揮できるようになり、患者への質の高い医療や看護ケアにつながると考えた。

研究成果の概要（英文）：The number of residents visiting foreign patients is expected to continue to increase. However, the utilization of existing resources such as medical interpreters and multilingual medical questionnaires to support the care of foreign patients in healthcare settings is currently low, creating barriers for nurses in providing care to foreign patients. This study aimed to analyze nurses' competency in caring for foreign patients, utilization status of existing resources, and factors inhibiting their utilization, particularly in the field of emergency medical care, where an increase in demand is expected. We explored these factors to develop support tools for foreign patient care that utilize these resources.

研究分野：看護学

キーワード：外国人患者 異文化看護 救急外来 看護師 支援 対応能力

1. 研究開始当初の背景

2016年の訪日外国人数は年間2,400万人であり、10年前と比較して3倍以上の増加が見られた(日本観光局, 2016)。さらに、政府は2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け4,000万人への到達を目標に掲げるなど(首相官邸, 2017)訪日外国人の増加が予測される。そのため、国内の医療機関において外国人を受入れるための環境整備は喫緊の課題である。

上記の状況に対し厚生労働省は、外国人患者に対する体制の整備支援を医療機関に対して実施している。医療通訳者の普及支援、問診票の多言語化などを図っており、多言語化された資料は誰でもウェブ上から入手し利用可能である。しかし、2017年8月に発表された実態調査では、65.3%の医療機関が外国人患者を受け入れているにもかかわらず、医療通訳の利用経験率は15.7%、多言語問診票の使用率は各言語において10%前後である(厚生労働省, 2017)。これら医療通訳や多言語問診票などの既存資源が活用されていない要因や、看護師がどのように外国人患者に対応しているかは明らかになっていない。

多民族国家の米国の基礎看護教育においては、異なる国籍や宗教、英語を母語としない患者への対応方法を学ぶ。一方、本邦においては、外国人患者への看護に関して教育方法は一般化されておらず、研究報告も少ない。このような現状の下、外国人患者に関する看護教育を受けていない本邦の看護師は、外国人患者への対応に困難感や不安、ためらいを感じている(野中・樋口, 2012; 小笠原 他, 2014)。言葉の壁について焦点化された文献が多い中、看護師の外国人患者への対応能力は語学力とは関連がなく、異文化交流や語学への関心を通して看護師自身が外国人との対人コミュニケーションに自信を持つことにより促進することが、申請者の調査(浅川, 2017)より示された。外国人患者対応を支援する資源の適切な活用が看護師の自信の一つとなり、外国人への対応能力を向上させると考える。

2. 研究の目的

看護師の外国人患者への対応能力を向上させることで、看護の質、看護師の自信やモチベーションの向上、患者の安全や満足度が向上すると考える。中でも需要の増加が見込まれる救急医療領域における、看護師の外国人患者への対応能力の向上を目指し、現場の看護師の外国人患者への対応能力、既存資源の活用状況、活用の阻害要因の分析を通して、既存資源を応用した外国人患者対応支援ツールの開発を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は基礎調査としてテキストレビュー(1)、異文化体験の効果に関する質問紙調査(2)、チャートレビュー(3)を行った。その上で、外国人患者への対応時の障壁を明らかにするために看護師へのインタビュー調査(4)、外国人患者へのインタビュー調査(5)を行った。分析作業は、国内外の質的研究の有識者、救急看護領域の有識者、海外の大学機関に所属する外国人研究協力者と行った。これまでに得られた情報を統合し、外国人患者対応支援ツールを検討した(6)。

- (1) テキストレビュー：外国人患者へ必要な対応能力を明らかにするために、諸外国の基礎看護学のテキストを用いたテキストレビューを実施した。テキストは、日本国内の2大学の図書室より入手可能な、英語で書かれているものを対象とした。また、重複を避けるために同一の著者により書かれている内容は除外した。外国人患者への対応に関連する章と其中で説明されている用語を抽出してコード化し、帰納的にカテゴリー化した。
- (2) 異文化体験に関する調査：国際的な環境で活躍する人材育成を行う上での教育内容や支援体制を検討する上で着目したSOC(Sense of Coherence; ストレス対処能力)は、看護師に必要な臨床能力とされており体験とともに30代までに後天的に形成される。異文化体験とSOCの関連を明らかにすることを目的とし、必修科目として海外研修に参加した看護系大学の学生へ、研修参加前と参加後に質問紙調査を実施した。SOCの測定には、日本語版SOC-13(戸ヶ里&山崎, 2005)の尺度を用いた。研修前後のSOCの得点および変化をt検定と対応のあるt検定で分析した。
- (3) チャートレビュー：A大学病院の救急外来に自力歩行(ウォークイン)で来院した外国人患者の院内トリアージ結果から、外国人患者とトリアージの特徴を解析し課題を抽出することを目的として、電子カルテと医療事務記録より後方的に情報を抽出し、記述統計の算出を行った。2019年7月~2020年5月までに救急外来に来院した、全外国人患者900件のうち自力歩行で来院した348件(38.7%)を対象とした。
- (4) 救急外来看護師へのインタビュー：救急外来看護師が感じている救急外来へウォークインで来院した外国人患者対応における困難の様相を内容を明らかにすることを目的に、2020年12月~2021年2月に半構造化面接法によるオンラインのフォーカスグループインタビューを実施した。二次救急医療機関のA大学病院救急外来で勤務経験のある看護師のうち、

突発的な病気や怪我を理由にウォークインで救急外来へ来院した外国人患者への対応経験がある看護師を対象とした。分析にはテーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) を用いた。

- (5) 救急外来受診経験のある外国人へのインタビュー：救急外来受診時に受けた看護実践に対する受け止めに明らかにすることを目的に、2021年2月～2022年4月に半構造面接法によるオンラインインタビューを英語で実施した。日本語を母語としない者で、突発的な病気や怪我を理由にウォークインで日本の救急外来へ受診した経験のある外国人を対象とした。分析にはテーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) を用いた。
- (6) 外国人患者対応支援ツールの開発：上記の研究結果を統合し、救急医療領域の看護師を対象とした、外国人患者対応に関する教育的支援内容を検討した。内容を検討する上で、教育設計の有識者、救急医療領域の有識者、ピッツバーグ大学シミュレーションセンター職員、外国人研究協力者とディスカッションを行った。

4. 研究成果

- (1) 採択された6件のテキストより、抽出されたカテゴリーは、「文化の概念」₁、「文化に関連する概念」₂、「文化の特徴」₃、「ダイバーシティの概念」₄、「健康格差」₅、「カルチャル・コンピテンシー」₆、「カルチャル・コンピテンシーの障壁」₇、「文化感受性」₈、「文化的意識」₉、「文化的知識」₁₀、「言語的コミュニケーション」₁₁、「患者中心のケアと異文化看護」₁₂、「文化的アセスメント」₁₃、「文化的看護過程」₁₄、「文化的看護介入」₁₅の15個のカテゴリーが抽出された。国内の外国人患者への看護に関するテキストと比較し、外国人患者への対応における具体的な方略や技術が国内のテキストには不足していることが明らかとなった。また、臨床現場のニーズとのギャップを埋めるべく教育や支援が必要であることが示唆された。
- (2) 海外研修 (平均滞在日数 13.6 日) へ参加した看護2年生 26 名のうち、研修前は 24 名、研修後は 20 名から回答が得られ、それぞれを 2 群比較の分析対象とした。研修前後の両方から回答が得られた 18 名を前後比較の分析対象とした。研修前後に比較した SOC 得点 ($p = .215$) ならびに SOC 得点の下位尺度 (把握可能感、処理可能感、有意味感)、健康状態にそれぞれ有意差は見られなかった。研修前後の SOC 得点の変化量では、研修に対する満足度のより高い群の方が、有意に得点に変化が見られた ($p = .036$)。下位尺度の変化量においては、「有意味感」(出来事に意味があるという感覚)にのみ、趣味がある群、海外生活の経験がない群、海外旅行の経験がない群において有意な正の変化量が見られた ($p = .009$, $p = .015$, $p = .049$)。海外研修の参加を希望していた群の方が、希望していなかった群に比べ研修後の SOC 得点が高かった ($p = .006$)。異文化体験をした看護系大学生の SOC は、体験への意欲の高さや満足度など「肯定的な情動」と関連があることが示唆された。異文化体験のレディネスを高める支援や、体験に対する意味付けを促す関わりが重要であることが示唆された。
- (3) 計47カ国のうちアジア国籍の患者が多く(159件, 45.7%)、その中でも中国(159件, 40.3%)が多かった。総合内科系の主訴で来院する患者が多く(100件, 28.7%)、全ケースの93.4%(325件)が帰宅の転帰を辿った。入院となった18件中7件は産婦人科系の主訴で来院した患者であった。トリアージ時の患者の主訴とトリアージ時の評価の実施率では、「疼痛」が最多であった(196件, 56.3%)。「疼痛」は緊急度の判定のために補足因子として用いられる非生理学的な指標の一つであるが、看護師による「ペインスケール」を用いた疼痛の評価実施率は19件(9.7%)と少なかった。8～9割のケースに対してトリアージの際にバイタルサイン測定が実施されている一方で、患者への観察や患者との会話を要する「意識・呼吸・循環」の評価の実施率は6割程度に、「SpO₂・呼吸数」の測定は4割以下に留まっていた。トリアージの結果と患者の転帰に大きな乖離は見られず、看護師による外国人患者へのトリアージ判断は妥当であり、アンダートリアージは少なかった可能性が示唆された。コミュニケーションを要しないバイタルサインの自動測定機能を充実化することで、緊急度の評価が円滑にかつ簡易的に実施することができる可能性がある。しかし一方で、外国人患者との直接的な接触による観察や会話を要する非生理学的指標の評価の実施率が低かったことから、トリアージの段階では外国人患者との直接的な関わりやコミュニケーション、また翻訳デバイスや通訳サービス等を用いた言語的支援ツールの使用が少ない可能性が示唆された。
- (4) 過去に救急外来に所属していた9名と、インタビュー時点で勤務していた6名の、合計5グループ15名の看護師に対するインタビューで理論的飽和に達したと判断した。15名中10名が30代女性、海外渡航経験のある研究参加者は10名、外国人の知人や友人がいた経験のある参加者は4名であり、日本語以外の得意な言語を持つと回答した参加者はいなかった。分析の結果、4つのテーマと計10個のサブテーマが抽出された。テーマとサブテーマ(カッコ内)はそれぞれ、「曖昧さを伴う関わりへの躊躇(不確実性の高い対象への躊躇、異文化接触への戸惑い)」₁、「診療の調和の喪失(労力の不均衡が阻む診療、迅速な緊急度判

断の欠如、ケアにおける円滑性の欠如)」、「難渋する治療目標の共有化(治療における共通理解の不透明感、迅速に得られない患者の納得感)」、「自己効力感の減退(自信を欠いた自律的实践、十分に得られない手応え、安楽を提供できない無力感)」であった。救急外来の看護師は、事前情報を把握できないウォークインの患者の特徴に加え、言葉の壁や文化的に合致したケアに関する知識の不足から、患者を予測的に理解することが困難であり、多様な患者と迅速に関係を構築する必要がある救急外来看護師にとって、予測できない価値や信念を受け入れる能力を高めておくことが必要であること示唆された。また、救急看護師は「診療科の円滑な運営」や、「診療科の効率的な管理」の役割があると認識しているが、看護師と外国人患者間に起こりうる言語・文化・文化を考慮した対応に関する知識の壁は、診察時間や滞在期間の延長を招くため、多くのマンパワーを割いていることが明らかとなった。言語的サポートの必要性が示唆される一方で、効果的に活用経験が少ないことや、誤訳や時間がかかるなど通訳サービスの利用に伴う限界により、医療通訳や翻訳デバイスの利用に関するトレーニングの必要性が示唆された。本研究結果については現在、英文国際雑誌へ投稿中である。

- (5) 13名のインタビューで理論的飽和に達したと判断した。日本の滞在歴は3~40年、滞在理由は本人や配偶者の仕事であった。13名中女性が10名、一番多い60代が5名、11名が出身地が米国であった。日本語のレベルは低~高まで多様であった。分析の結果、4つのテーマと計9個のサブテーマが抽出された。テーマとサブテーマ(カッコ内)はそれぞれ、「異文化の摩擦(受容できない異なる医療文化、考慮されない慣習の相違)」、「患者不在の医療(不十分な情報提供、一方的な看護対応)」、「異文化の関わりへの躊躇(異文化接触への戸惑い、マイノリティあることへの気後れ)」、「言語を越えた繋がり構築(寄り添いを感じる関わり、プロフェッショナルな関わりによる信頼感、円滑なコミュニケーションの試み)」であった。救急外来看護師の、外国人患者に対する躊躇や自律性の欠如に伴う消極性は、外国人患者にとって、医療者への不信感を生じさせている可能性がある。また、言語の壁のみならず、医療に対する信念や文化的背景の相違が、双方の不十分な理解と治療目標共有の難渋を招いていることが示唆された。これは、救急診療や看護のスピードを失速させる要因であると考えられる。多くの患者が利用する中で患者へ速やかに必要な医療が提供できるよう、救急医療領域の看護師が重んじる診療の迅速性や円滑性が担保できる支援が必要である。本研究結果については現在、英文国際雑誌へ投稿準備中である。
- (6) 救急医療領域における外国人患者対応に必要な態度、知識、技術の獲得を通して看護師の情動や行動に躊躇がなく自律的に看護ケアが実践できることを目指し、講義・ビデオ学習・トリアージ演習の構成による教育的支援を検討した。また、各項目における目標、学習活動、教材、指導者の役割を検討した。演習内容では、模擬患者とのトリアージ場面を想定したシナリオ(疼痛の症状を有するイスラム文化の背景をもつ30代の女性患者)を作成した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 浅川翔子、上野浩一、武田祐子、佐々木淳一
2. 発表標題 A大学病院へ自力歩行で来院した外国人患者とトリアージの特徴
3. 学会等名 第48回日本救急医学会総会・学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ASAKAWA, Shoko
2. 発表標題 Analysis of Cultural Care Content in Fundamentals of Nursing Textbooks
3. 学会等名 Transcultural Nursing Society Conference in Japan 2020 (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 ASAKAWA, Shoko, MURATA, Hiroaki
2. 発表標題 Changes in Sense of Coherence and Related Factors Among Japanese Undergraduate Nursing Students Before and After Overseas Training
3. 学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	武田 祐子 (TAKEDA Yuko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐々木 淳一 (SASAKI Junichi)		
研究協力者	上野 浩一 (UENO Koichi)		
研究協力者	村田 洋章 (MURATA Hiroaki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	University of Pittsburgh			